



Title	日本占領期の北京文壇における日本文学者と日本メディア
Author(s)	彭, 雨新
Citation	大阪大学, 2018, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/70778
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 （ 彭 雨 新 （ PENG YUXIN ） ）

論文題名 日本占領期の北京文壇における日本文学者と日本メディア

論文内容の要旨

本研究は1937-45年、日本占領期の北京文壇における現地日本文学者、文学団体、日本（日系）メディアに注目し、日本人作家たちの北京における文学活動、北京経験に基づいた文学作品、中国日文学者との交流、および日本（日系）メディアのそれに対する宣伝と報道の実態を考察したものである。

本論文は「序章」と「終章」、および3部構成の全6章に加え、1つの補論からなる。第一部では、日本占領下の北京に滞在していた現地日本文学青年によって作られた文学団体燕京文学社の軌跡と同人たちの北京時代の文学活動を検討した。

第一章では、燕京文学社と華北作家協会という日本占領下の北京における日中青年文学団体の交流を考察した。二つの団体は、華北作家協会が正式に成立する前から、メンバーの個人間の付き合いがあった。以降の華北文壇においては、さらに団体ごとの交流を頻繁に行った。こうした点をまず整理した。次に、本章では特に、新しく発見された日本占領下の北京における唯一の日本語新聞『東亜新報』を用いて、華北作家協会の主要同人である袁犀の長編小説『貝殻』が第一回大東亜文学賞を受賞した前後に、燕京文学社同人がこの作品をめぐる行った議論を考察した。燕京文学社の同人たちは『貝殻』の受賞だけではなく、小説そのものに注目し、人物造形、描写、構成、言語などの側面から分析した。小説における問題点を厳しく指摘する一方、燕京文学社同人が華北作家協会の青年作家袁犀に対して深い理解と友情を持っていたことがうかがえる。

第二章では、燕京文学社の主要同人である日本人青年作家飯塚朗の占領下北京における文学活動を検討する。燕京文学社同人の軌跡を追う中で、1942年7月に、彼らが参加した「中日文学青年座談会」に着目するに至った。この座談会には、1941-42年末の北京文壇を騒がせた「色情文学」論争に関わる発言が見られ、燕京文学社同人の飯塚朗が注目すべき発言をしている。この発言の意味を考える上で、戦後に書かれた中藺英助の小説「燕京八景」（1994）を取り上げる。中藺は上記の座談会に臨席しており、彼が戦後書いたこの小説には、座談会のことが描かれており、飯塚朗をモデルとした人物が「色情文学」こそ本物の文学だという意見を主張したことが書かれている。まず、1941-42年の北京文壇における「色情文学」論争という背景を整理したうえで、燕京文学社がこのような文壇論争の影響のもとで参加した「中日文学青年座談会」の実情を解明した。飯塚の発言の意味を考えるために、中藺英助の小説と飯塚自身の北京時代の文学活動を考察した。これらをあわせて検討した結果、1942年の座談会における飯塚の発言は、中藺の小説に書かれているように、「時代」に背いている「色情文学」こそ本物の文学だと考えた上でのものであったと言える。少なくとも、才子佳人小説の影響を受けつつ、時局色の薄い恋愛小説を好んで創作した飯塚は、座談会で多様なものを「色情文学」だと一緒に否定する当時の状況に強い違和感を覚えていたと思われる。

第二部では、現地北京で自発的に作られた個人による文学青年団体と性質が異なり、戦時中日本内地の国家統制のもとにあった公の文学団体である日本文学報国会に注目し、とりわけ北京派遣員の林房雄と真船豊の北京での活動を考察した。

第三章は、林房雄の北京時代に注目する。林房雄は1937年上海戦線に従軍し、1940年から満洲国及び中国の日本占領地に往来するようになった。とりわけ、1942、43年、日本文学報国会の北京派遣員として北京で4か月、つづいて半年も滞在し、北京の文化界と盛んに交流を行った。敗戦直後、林房雄は作家として追放されたが、1946年、彼の戦後最初の小説集『香妃の妹』（1946）を出

版した。その中に収録されている「香妃の妹」、「北京の壺」の二篇は占領下の北京を舞台としている。林房雄が戦時中を語る資料がほとんど残っていないため、日中両国とも林房雄と日中戦争に注目する先行研究が極めて少ない。本章では『東亜新報』を用い、林の北京での活動を再整理したうえで、短篇小説「香妃の妹」、「北京の壺」との関係を検討した。

「香妃の妹」は林房雄では珍しく戦争を反省する姿勢を示している作品だが、その反省も決して深刻なものではない。また、小説の主人公と1943年の林房雄の中国占領地における行動の一致性が高く、小説の自伝的要素がうかがえる。さらに、林が北京に滞在している間に『東亜新報』には、中国の歴史上の人物「香妃」をめぐる連載記事が見られるため、本章では、それが北京滞在中の林房雄に創作のインスピレーションを与えた可能性を検討した。

次の「北京の壺」は画家の梅原龍三郎を主人公のモデルにした作品である。梅原とその絵については「香妃の妹」でも言及されている。これまで、林と梅原に交流があったことは指摘されていないため、本章では、戦前の梅原の北京関係画集と、林と梅原の北京での出会いという二つの方向から二人の関係を考察した。結果として、林と梅原は1943年、ともに北京に滞在している間に知り合った可能性が高いが、二人の戦時国策に対する異なる立場により、直接の交流を梅原のほうから避けたことが推測できる。

第四章は昭和時代の劇作家、小説家であり、戦時中報国会の北京派遣員であった真船豊を取り上げる。真船は1944年、日本文学報国会の派遣で北京に渡り、のちに北京で終戦を迎えた。本章では、真船の北京三連作の一つである「苔と反故紙」に描かれる北京文壇に注目し、とりわけ中国日文学者沈啓无をめぐる北京の文学者、文学団体、事件を考察し、真船が描いた独自の沈啓无像を検討した。真船の描く、恩師の周作人に破門された後の沈啓无は、自ら北京文壇および国の政治権力闘争と距離を置く一方、文壇仲間との関係維持に努め、破門されても周作人を尊敬している高潔な文人だと言える。また、終戦後の大混乱の中国では、沈啓无は蒙古の奥の砂漠で白骨になるしかないという、真船が想像した戦後の沈の運命は、彼の中国関係作品によく出てくる「モンゴルイメージ」とも相通していることを指摘した。

第三部では、今まで注目されていなかった個人としての日本文学者、文化人の北京滞在を整理し、現地文化人との一時的な交流や、関連する小説、エッセーを資料としてまとめ、提示する。また、『東亜新報』などの現地日本メディアが、北京の著名文化人、文壇事件をどのように報道・記録したかを整理した。

第五章は、在日朝鮮人作家金史良が、抗日解放区へ脱出する直前の1945年5月、『東亜新報』の学芸記者として北京滞在中の中藺英助と北京飯店で出会い、夜を徹して飲み明かしたエピソードについて考察する。金史良は戦時中の在日朝鮮人作家として非常に重要な存在である。日本語で書かれた小説「光の中に」（1939）は芥川賞候補となったが、1945年中国共産党の解放地区に脱出し、1950年朝鮮戦争の時、死亡したとされている。金史良と中藺英助が北京で過ごしたたった一晚のことであるが、中藺は終戦直後から2000年代まで、小説や、エッセー、回想録の中で何度も繰り返し書き続けた。本章では、中藺英助が書いた金史良に関する作品を整理した上で、主に小説における金史良描写を分析し、朝鮮文学研究者、評論家の安宇植と白鉄の言論も視野に入れながら、占領下の北京でしか生まれ得なかった中藺英助の特別な朝鮮経験を考察した。

第六章は『東亜新報』を用い、1942-45年の紙面における周作人関係の記事を整理した。日中におけるこれまでの周作人研究に新史料を補充し、占領下北京における「現地日本語メディア」という報道・記録の新たな視点を提供することを主な目的とし、新史料に基づく周作人再考の今後の可能性も検討する。とりわけ1943、44年の記事を中心に、周作人狙撃事件、沈啓无破門事件、周作人と武者小路実篤の交流という三つの内容について考察した。まず、狙撃事件について、『東亜新報』が発見されたことにより、事件により近い時代の資料が見つかり、周・沈二人の関係が破綻する前の周作人の主張が初めて分かった。記事から、周作人は狙撃事件において、沈が自分を庇っていなかったことを、二人の関係が破綻する前から主張していたことが明らかになった。次に、戦時中『東亜新報』の記者を務めた中藺英助の戦後の小説『夜よシンバルをうち鳴らせ』の中で、破門事件が描かれ、とりわけ、周作人が事件について主人公宛に書いた手紙が詳しく描写されている。今回、『東亜新報』から小説と対応する内容の記事が見つかり、その詳細を考察した。最後に、1943年の周作人と武者小路実篤との交流に注目した。『東亜新報』には、武者小路から周作人に贈

られた「富岡鉄斎の扇子絵」の写真と関連報道が見られる。これらの記事から、①武者小路と周作人の友情は、1943年という時点では、戦時中、日華文壇の提携親善の代表として宣伝され、利用されていること、②戦時中の周作人が日本に対して複雑な心境を抱き、曖昧な立場を取っていたことが読み取れる。そこから、1943年という時点における周作人の「占領地の文化巨星」としての立場、そして大東亜文化建設という日本側の方針に対する複雑な考え方について、新たな解釈の余地を提示した。

日本占領期の北京における日本人文学者、文学団体の活動は、同時代の満洲や上海を対象とした研究よりだいぶ遅れているとも言える。しかし、日本占領期の北京における文学作品・文学活動の総量は満洲、上海よりも大きいし、性格もより複雑である。近年、中国側に保存されている中国語資料を中心に、日本占領期の北京文学研究が重視され、その価値も大いに認められている。本研究が注目した燕京文学社、日本文学報国会、そして関連日本人文学者、日本（日系）メディアの実態は、戦時日本文学史、日中文学交流史、そして日本占領期の北京文学研究の一環として、このような文学史研究の空白の一端を埋める意義を持っている。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (彭 雨新)		
	(職)	氏 名
論文審査担当者	主 査 教授	五之治 昌比呂
	副 査 教授	青野 繁治
	副 査 准教授	柴田 芳成
	副 査 准教授	佐野 方郁
	副 査 准教授	水野 亜紀子

論文審査の結果の要旨

提出された論文「日本占領期の北京文壇における日本文学者と日本メディア」は、日本占領期の北京文壇に注目し、北京在住日本文学者・文学団体の活動と中国日本文学者・文学団体との交流、北京を訪れた日本文学者の北京経験とそれに基づく作品、それらを取りあげる日本（日系）メディアの報道といったものの実態を明らかにし、その意味を考察しようとするものである。

論文の構成は、序章、第1部（第1章、第2章）、第2部（第3章、第4章）、第3部（第5章、第6章）、終章からなり、末尾に一編の補論が付いている。

序章では、本研究の背景を述べて先行研究を紹介したあと、日本占領期の北京文壇について概説している。

第1部は、北京に在住していた日本文学青年たちによる文学団体、燕京文学社の活動を論じるものである。第1章では、中国側の団体、華北作家協会と燕京文学社との交流を扱う。交流の概要を整理したあと、稿者が独自に発掘した資料である、北京で発行されていた日本語新聞『東亜新報』を用いて、交流のひとつの例を詳しく分析する。華北作家協会の主要同人である袁犀は長編小説『貝殻』によって第一回大東亜文学賞を受賞した。受賞の是非のみについての議論が多かったなか、燕京文学社の同人たちは小説そのものに注目して作品を論じ、厳しい批判を加えながらも、袁犀に対して深い理解と友情を示していたことを明らかにしている。

第2章は、燕京文学社の主要同人であった飯塚朗に焦点を当てる。1941～42年に北京文壇では「色情文学論争」があった。飯塚ら同人は1942年7月に「中日文学青年座談会」に参加したが、その中で「色情文学」が話題になり、飯塚は注目すべき発言をした。しかし、中国側の資料では飯塚の意図が読み取れない訳文になっている。そこで、中藺英助による戦後の小説と飯塚自身の北京時代の文学活動を参照することにより、飯塚が色情文学を積極的に評価していたという結論を導いている。また、燕京文学社同人たちが政治協力に否定的で、純文学の創作を目指していたことも明らかにしている。

第2部は、日本政府の統制下にあった文学団体、日本文学報国会の主要メンバーの北京における活動を扱う。第3章は林房雄の活動に注目する。まず、『東亜新報』と林の著作によって従来不十分であった情報を補い、林の北京での活動を整理している。つぎに林が北京体験に基づいて戦後に書いた「香妃の妹」という短編小説を取りあげ、『東亜新報』の中の記事が林に「香妃の妹」を書くインスピレーションを与えた可能性を指摘している。また、同じく戦後の作品である「北京の壺」について、主人公のモデルが画家の梅原龍三郎であると推測し、『東亜新報』を含めた諸資料を用いて林と梅原の北京における交流の可能性をさぐる。結論として、林が長らく梅原の絵を好んでいたことはたしかであるが、北京で二人の間に積極的な交流があった可能性は低いことを指摘している。

第4章は、日本文学報国会の北京派遣員であった真船豊を対象とする。真船の北京での活動を整理するとともに、彼が戦後に発表した北京時代をテーマとする小説から、当時の北京の日本文学者、文学団体、事件などを取りあげて分析する。とくに、周作人の弟子であり、のちに周から破門された沈啓无の人物像について詳しく考察する。沈が高潔な文人として描かれていることを指摘し、他の資料も用いることで、真船と沈の親交についての詳細を明らかにしている。

第3部は、これまであまり注目されてこなかった日本文学者の北京での活動と、『東亜新報』における周作人をめぐる報道をとりあげる。第5章は、燕京文学社同人であり、『東亜新報』の記者でもあった中藺英助と、朝鮮人作家金史良との交流を扱う。二人の交流は北京での一夜の会談のみであったが、中藺は終戦直後から小説やエッセーで何度も金史良のことを書き続けた。そうした中藺の記述と他の資料をつきあわせることで、北京での会談の詳細を明らかにしている。そして、それが中藺にとっては占領下北京という特殊な環境での特別な「朝鮮経験」であったとし、戦後中藺が朝鮮問題に関する著述を行うことになる源泉となったと主張している。

第6章は、『東亜新報』における周作人関係の記事を整理・分析することで、日中における従来の周作人研究に新資料を提供することを目的とする。『東亜新報』の発掘によって、1939年の周作人狙撃事件に近い時期の周の主張を知ることができるようになり、狙撃時に沈啓无が周をかばっていない可能性が高いことを指摘している。また、『東亜新報』の記事を分析することで、中藺英助が小説の中で描いた1944年の沈啓无破門事件の記述がおおむね事実に基づいていることを明らかにしている。最後に、1943年の周作人と武者小路実篤との交流に注目し、『東亜新報』の記事により、従来知られていなかった交流についての事実を発掘している。また、こうした日本メディアの報道のあり方は、当時の周が日本に対して取っていた複雑な態度を垣間見させるものであることを指摘している。

終章では、第1章から第6章までの内容を簡潔にまとめたあと、日本占領期の北京という環境の特殊性に注目し、論文で扱った事例に共通してみられる自由度の高さと複雑性という二つの特徴について考察を行っている。さらに、占領下北京というものが未開拓な研究対象であることを説明し、今後の研究の可能性を豊富に指摘して本論をとじている。

論文の末尾に付された補論は、日系中国語雑誌『華文大阪毎日』の記事を分析することで、菊池寛と穆時英の交流を明らかにするものである。日系メディアを扱ってはいるが、北京文壇とは直接関係がないため補論になっている。

本論文は日本占領期の北京文壇をめぐる様々な事柄を扱っている。そのため、論が作家個人の体験に関するものにとどまり、北京文壇の大きな文脈にあまりつながっていない部分がある点が見られることは、本論文の弱い点として指摘できる。しかし、日本占領期の文壇の研究に関しては上海と満州が研究の中心となっている現状において、日中双方の膨大な資料を読み込み、『東亜新報』のように自ら資料を発掘することも行って、研究が手薄であった北京文壇についてその実態を一定程度明らかにできたことは、きわめて高く評価することができるであろう。

以上のような点をふまえて、論文審査委員会は、全員一致で本論文が博士（日本語・日本文化）の学位にふさわしいものであるという結論に至った。